「新しい戦前」段階に入ったこの国での教育は

金平茂紀

かねひら　しげのり
1953年北海道生まれ
東京大学文学部社会学科卒業
1977年、TBS入社以降、一貫して報道現場の仕事に携わる
同局で、モスクワ支局長、ワシントン支局長、「筑紫哲也NEWS23」編集長、報道局長などを歴任
2010年から2022年までTBS「報道特集」キャスター
早稲田大学大学院客員教授（2013～2022年）を経て
現在、沖縄国際大学非常勤講師などをつとめる
日本ペンクラブ言論表現委員長
著書に『ロシアより愛をこめて』（筑摩書房、1995年）
『沖縄ワジワジー通信』（七つ森書館、2013年）
『二十三時的』（スイッチパブリッシング、2002年）
『筑紫哲也NEWS23とその時代』（講談社、2021年）など
翻訳絵本に『じじつはじじつ、ほんとうのことだよ』
（イマジネイション・プラス、2022年）など

二〇二二年という歴史の「転換点」を経て、私たちの国、それを取り巻く国際社会は、大きな変容を遂げている。すでに「新しい戦前」に突入したのではないか。そのような認識を持つジャーナリストの一人として、教育者の方々と共有したい筆者の見方を記しておきたい。

■「新しい戦前」　長年、テレビ報道の仕事に携わってきた経験から、時代がひどく息苦しい方向へと向かっているのではないか、と憂慮することが多くなった。仕事がら教育現場の方々と交流する機会も多く、教師や子どもたちからは、悲鳴に近い訴えを聞くこともあった。以下、なぜこのような変容が、社会の諸分野で起きているのか。どのような現象が具体的に起き、この先どうなってしまうのか。それに対し、教育者は、学校は、子どもたちは、保護者たちは、何をどう認識し、どのようなことに注力すべきなのかを共に考えてみたい。

二〇二二年は歴史上の大きな転換点だったと後世の歴史家たちは位置づけるのではないか。日本の近代化の出発点と言われる明治維新から七七年たって、日本は、第二次世界大戦において日独伊の枢軸国のひとつとして参戦。太平洋戦争で無惨な敗北を喫した。奇しくもそれから同じ七七年という歳月が経過して迎えたのが二〇二二年だった。筆者は二〇二二年に起きた内外の二つの出来事に着目して、日本は構造的に転換したと考えている。

■ウクライナ侵略　ひとつは二月二四日に、ロシアがウクライナに軍事侵攻し（国際法違反の明白な侵略行為である）、ウクライナ領土内の人々を殺傷し、インフラを破壊した。この戦争はこの原稿の執筆時点（二〇二三年七月）も続いている。筆者は二〇二一年、二度にわたってウクライナ領土内で取材を続けたが、戦争の戦闘現場の中心となっているウクライナ東部地域に関しては、二〇一四年のいわゆるユーロ＝マイダン革命直後の「内戦状態」の際にも現地を取材した。同じウクライナ人同士が戦闘状態になっていた。ロシア側からの分離独立派への軍事支援があったとしても、「内戦状態」にあったことは否定しがたい事実として目撃した。その際、ロシアはウクライナ領のクリミアを併合した。国際社会の反応は、半ば容認のような弱いものだったと記憶している。それから八年後に、ソ連時代にはひとつの国に所属していた二つの、いわば「兄弟国」が戦争をするという極限状況を、お前はどの程度真摯に予期していたのかと問われれば、重苦しい反省に見舞われることを告白しなければならない。戦争が起こると、出来事の主語は「国家」となる。ロシアがウクライナに侵略戦争をしかけた、と。だが、実際に戦場で起きていることの主語は、「国家」ではなく生身の「人間」である。誰かに命じられた生身の兵士が殺傷行為を行っている。また自分を守るために生身の住民たちが逃げ惑う。その主語は「人間」だ。私は殺した。私は逃げた。私は破壊された。だがいったん戦争が始まると、そのナラティブ（話法）の主語は「国家」になる。民の視点は後回しにされる。これはどの国においてもそうだ。

■正義論VS和平論　ウクライナ戦争により、それまでの国際政治の「平和論」の基礎にあったものが潰えそうになっている。戦争が起こったら、歴史上の教訓として、できるだけ早く停戦、休戦の努力をして戦争の拡大を防ぐという原則があった。その原則が今回のウクライナ戦争では吹っ飛んでしまった感がある。筆者自身、「正義論VS和平論」という図式を使ってこのことの説明を試みてきた。戦争当事国ではない第三国が、このウクライナ戦争にどう向き合うかについて、世界には大きな